ず、寛永十八年二月七日、將軍家、○家光　德川　あらたに台命をくだしたまひて、諸家の系圖をあつめあましむ、資宗これを奉行す、民部卿法印道春これにそふて、そのあむべきおもむきをしめす、こゝにをひて諸大小名御譜代御近習御番衆等、およそ恩祿をかうふるもの、大小となく、みな其家譜をさゝぐるもの數千人なり、道春をよび子春齋、件の家譜をみて其眞僞をわきまへ、其新舊をただす、且又仰によりて漢字假字兩字をつくらしむ、其事繁多なるゆへに、十九年三月十日、かさねて台命くだりて、僧錄金地院元良長老、尾州の法眼正意、水戸の書生卜幽了的、おなじく其事にあづかる、高野山見樹院立詮を乞ひ、御右筆大橋重政、小嶋重俊、倭字の事にあづかる、且又京都五岳の僧侶十七人をめして、江戸にきたらしむ、こゝにをひて、諸家の系譜をわかちくばる、道春春齋は、清和源氏の部をつかさどる、立詮これに屬す、元良をよび五岳衆は、藤原氏の部をつかさどる、重政これに屬す、正意は、諸氏の部をえらび、水戸の書生は、平氏の部をあむ、重俊これに屬す、其外草案をつくり、淨書にあづかるもの數十人におよべり、年を經て全編をなす、其系譜にくはしきあり、あら〳〵しきある事は、おの〳〵獻ずる所の家本長短あるによりてなり、漢字倭字、都合三百七十二卷、其名を題して寛永諸家系圖傳といふ、かくのごときの大部なる事、本朝のむかしより、いまだきかざるところ也、誠に太平御一統の御時にあらずば、いかでかこゝにいたらんや、諸家其官祿をしる時は、御恩のあつき事をわすれず、其勳功をのする時は、先祖のつとめをおもふべく、さかれば忠孝の道、無窮の德とともに、千萬世の後まで、たれかあふぎたてまつらざらんや、

寛永二十年癸未九月吉日　　從五位下太田備中守源資宗○又見羅山文集

〔折たく柴の記上〕庚辰の年○元祿十三年十二月十一日に、國初より此かた、その封祿萬石以上の人々の事まで、進講のいとまあらむをり〳〵に、いかにも考るしてまゐらせよかしなど仰られしに、明けの年辛巳の正月十一日に、其事を以て仰下さる、同き十四日に、まづ其書を撰ぶべき凡例を考